

教育相談的態度を生かした指導

堀 川 正 紀*

この実践は、今までに相談を持ちかけてくる生徒の本当の気持ちは何なのだろうか、ということに思い及ばなかった教師が、教育相談という新しい分野を知り、自分の至らなかったことを痛切に感じ、ひたすら生徒の声に耳を傾けることを念頭に、その気持ちを理解しようと心がけ、担任する学級の生徒とかわかっていくようすを、事例をあげ、逐語記録を中心に述べたものである。

I はじめに

この春の異動で新しい学校へ勤務することになり、いささか戸惑ったのであるが、まず最も身近かな担任の学級に着目することにした。そして、早く生徒達と仲よくしたい、また個々の生徒を理解したいということから、とにかく受容的な態度を取ることにし、何でも話してくれる生徒になって欲しいと願ったのである。ところで、新任校ともなれば、誰でもそうなるのではないかと思うが、生徒も教師も、言葉使いや行動などに良く見せようという心理が働くものと思われる。悪く言えば他人行儀というやつであるが、文字通り出会いである。しかし、この出会いこそが大切と思うあまりに、ここで一つの壁につき当ることになる。というのは、生徒に自分を良く見せようという気持ちが意識するしないにかかわらず至るところに表われ、いつの間にか日頃の自分から離れてしまい、ありのままの自分ではなくなってしまったということである。後にその種の話聞いて、なる程と思うのであるが、しかしこのような状態は長く続かず、自然によい意味でメッキがはげ、より親密に生徒と接していけるようになったと思われる。このようにして何とか気軽に話せる雰囲気を作ることを念じて実践を続けたわけである。

II 実践の概要

1 実践の対象とねらい

担任学級全生徒を対象とし、また生徒にはできるだけ受容的な態度で係わっていく。

2 学級の実態

- (1) 1年B組 男子20名 女子20名 計40名(校区の5小学校2分校から集まった80名を入学時に2学級に編成 新担任)
- (2) 知能偏差値の分布 5段階 5% 4段階 33% 3段階 38% 2段階 25% 1段階なし
- (3) 1年生の特性からか、全般に幼稚で、教師への依存度が高い。家庭での学習はあまりやらない傾向にあるが、ほぼ知能相応の学力はあると思われた。

* 東頸城郡松之山町立松之山中学校

3 学級の生徒に係わる教師の姿勢とその実践

教師と生徒、生徒と生徒の間に、よりよい関係ができるにはどうしたらよいか考え、まず何でも話し合える学級をと思い、次のようなことを最初の学級指導で話しておく。1. どんなことでもよいから思ったことはどんどん発言しよう。2. おかしい発言があっても、あざ笑うようなことは絶対しない。3. 小学校のことは忘れ、今全員が成績その他すべてが0であって、そろってスタートラインに並んだのだからがんばろう。このようにして1Bクラスはスタートしたのであるが、併せて教師は、1. まず生徒の言うことに耳を傾け受容することに努める。2. どの生徒とも一日に一回は会話をするつもりで、ことあるごとに声をかける努力をする。3. 叱るべきは叱り、誉めるべきは大いに誉める。4. 何でも教師にしてもらおうという依存的な態度を、少しずつ自分で解決していくようにしむける。といったことに留意しながら生徒と係わっていった。とにかく生徒達は元気が良く、何でも話してくれるようである。小学校の先生からの連絡で、あまりしゃべらないという生徒も二人程いたが、これらの生徒も結構しゃべってくれている。しかし、一学期現在での話であるから今後このままで行くという保証はないし、また変ってしかるべきものであるとも思っている。

ところで、一口に受容とはいっても、これがいかに困難なことであるかということを以下、紙面の都合で個人的な三つの事例について逐語記録を中心に考えてみたい。

事例その1

- (1) 主訴 応援部員に無理やり選ばれて、どうしてよいかわからない。
 (2) 対象 M男(成績中上、知能偏差値61 多少落ち着きを欠くが、大変元気で発言も多く、仲の良い友人も数名いる。)
 (3) 逐語と考察 4月17日 相談室にてM男と 第1回目

放課後廊下でバツタリ学級のM男と行き合う。日頃元気が良いのに今日は妙に沈んでいる。変だなと思った瞬間、M男がワッとはかりに大声で泣き出し、だきついてくる。突然のことに驚いたが、気をとりなおし、どうしたのか聞くが「先生!」と言って泣きじゃくるばかりで要領を得ない。廊下では他の生徒の眼もある、丁度遅良くそばに相談室があったので、取りあえず二人でそこへ入る。二人で椅子に腰を下ろし、M男が泣くのをやめるまで無言で待つ。なかなかやめない。たまりかねて、

T₁ どうしたの?

M₁ ……………

T₂ どうしたの? ……………何かよっぽどショックなことがあったんだね?

M₂ 先生、……………どうしても応援部に入らなければならぬんですか?

T₃ あゝ応援部の部員にえらばれたんだね?

M₃ はい、……………でも入りたくないんです。

T₄ 入りたくない。

M₄ どうしても入りたくないんです。(泣きやむ)

T₅ どうしても。

M₅ 絶対どうしてもです。

T₆ ……………どうして?

M₆ あんな決め方……………。僕がいやだというのに賛成賛成と言って勝手に決めたんです。

T₇ ははあ、すると決め方が気にいらぬわけね。

M₇ はい。それに……………大きい声が出ないし…………。

T₈ 大きい声が出ない。

M₈ 声がかれちゃう。

T₉ 声がかかる。……………ねえ……………

M₉ (口調があらたまって) まあ、やってみたわけじゃあないけど、生れつき大きな声だすのがてなんです。

T₁₀ 大きな声……ああ生れつきねえ。

M₁₀ それもやってみないとわからないけど……。

T₁₁ やってみないとねえ……。

M₁₁ それに……みんなの前でやるの恥ずかしい。

T₁₂ あゝ、恥ずかしいのね。(うなずく) うーん。

恥ずかしいのか。困ったねえ……。

M₁₂ もう一回決め直してもらいたいです。

T₁₃ 決め直すねえ……。

M₁₃ ぜひおねがいします。

この間約20分。丁度急用ができたので、学級でどうするかM男から意見として出してみるように勧めると、本人もその気になったらしく、うなずいている。翌日また会うことを約束して別れる。

翌日の短学活にM男は提言している。応援部員の決め方は納得がいけないから決め直してもらいたいです。一度決めたものは、そう簡単に決め直すわけにはいかないという強い意見もあったが、大半は決めた方に問題があったと認め、やりなおそうということになる。しかし、結局は他に適任者がいないということ、またもやM男が選ばれたのである。今度はM男も納得したらしく、快よく承諾している。

突然のでき事でもあり、心のゆとりもなかったが、M男の気持ちを受け入れていないと思われる発言が随所に見られる。T₁はもっと待った方がよかったのかもしれない。T₂は当然と言えば当然な発言であろう。T₃が問題で、応援部に入りたくないというM男の気持ちを受けとめてはいない。M男がなぜ泣いたのかその原因がわかってばんざいといった安心感からでた言葉である。したがって、M₃のはい、のあとに、でもがくるのである。T₄も問題がある。その前のM₃～M₅で盛んにくり返しているどうしても入りたくないという気持ちを少しも受け入れていない。しかしM₆以後M男の気持ちに変化し、決め方が悪いからM₉、M₁₀あたりでは、やってみようかなという具合に変ってきているのである。蛇足ながらT₁₂の困ったねえは教師が困っているのではなくして何であろうか。

4月18日 放課後 相談室にてM男と 第2回目

T₁ さっき決め直している所を見ていたけど、どう?

M₁ はい、やってみます。

T₂ そう、それはよかった。ところで、気持ち

会話はここでぶつりと切れ、M男は昨日とは打って変って元の明るい顔に戻っている。一言ががんばるようについて別れる。その後も相変らず元気で練習に励み、最近では一年生ながらリーダーを務めるなどしてがんばっている。

T₃のなるほどねえも聞きようによっては、ずいぶん冷たい発言である。あゝそうか君はそう思っているのか、私はどうでもよいのだけだね。とは受け取れないだろうか。決してそんな気持ちで言ったつもりはないのだが。そのせいであろうか、会話はそこでストップしてしまうのである。比較的単純な問題なので、これでよいのかもしれないが、いずれにせよ、M男との係わりから、期せずして相談室を利用するようになるのだが、一回目の後半の彼の言葉から、応援部員をやりたいという意欲が充分感じられたので、二回目は簡単にすませてしまったのである。この種のトラブルは年度初めによくあることで今回の場合、決め方がいいかげんだったこと、そして学級の他の生徒もその事実を素直に認めてくれたからよかったが、こじれると困ったことになる。学級の生徒にもその点よく話はしておいた。

事例その2

(1) 主訴 部活動をやめたいが、上級生が許してくれないので困る。

(2) 対象 C子, M子(二人とも成績は良い方 知能偏差値 C子60 M子50 C子はおとなし

く、発言もあまりしないが、M子は人なつこく何でも気軽に話す。出身小学校が同じ。)

(3) 逐語と考察 4月20日 放課後 教務室にて C子, M子と 第1回目

C子とM子二人で教務室にやってくる。教務室には他に誰もいない。最初はもじもじして何もない。しばらくしてポツリと「ブラスバンドをやめたい」と言う。二週間程前に入部したばかりである。一年生は四月一ぱいはテスト期間と称して、ようすを見、正式に入部が決定するのは五月に入ってからであるから、やめる、やめないは本人の自由の筈である。どうして困っているのかわからずあれこれ聞いてみるが、さっぱりわからない。そのうちに彼女等の乗るスクールバスの最終便の時間が迫ってきて話しを続けていられなくなり、翌日話をすることにして帰す。

4月21日 昼休み 相談室にて C子, M子と 第2回目

T₁ やめたいのね?

M₁ はい。

T₂ どうして?

M₂ だって…… (二人でこそそこそ内緒話) だって合わないんです。

T₃ 合わない。

M₃ 音も、いい音でないし、……

T₄ いい音ねえ……

M₄ もっと楽しだと思っていたんだけど……

T₅ 意外にきついね。

M₅ はい。

C₁ そうなんです。

M₆ それに……うまくなりそうもないし……
……ねえCちゃん。

C₂ そう。……

T₆ 一年生で入ったばかりだからねえ……

M₇ そりゃあそうだけど、……まあだめだ
と思うなあ……

この後、部の上級生に聞いてみると、二人ともうまくて見込みがあるという話である。

T₇ 何が?

M₈ だから、言ったでしょう。やっぱり、わかるんだなあ。

T₈ わかる。

M₉ やっぱり、うまくならないと思う。

T₉ うまくなりねえ。……Cさんはどうですか。

C₃ やっぱりMさんと同じで、合わないんです。

T₁₀ 合わない。

(C, M沈黙)

T₁₁ どうも何か、にえきらないというか、すっきりしないところがあるような気がするんだけどねえ。他に何かあるの?

(C, M沈黙を守り続ける。あいにく昼休みが短かく、五限の授業が始まる気配がする。) じゃあ今日はこれ位にして、また明日にでも話してみようか。

C₄ はい、そうします。

口では受容と言いながら、実際にはなかなか思うように行かないものである。T₂でさっそく質問している。やめたいという気持ちを充分に受けとめていない。その証拠に、次のM₂でだってと言って困っている。T₆はまあまあであろう。次のM₅, C₁が肯定している。T₆ではあきらかに話題をそらしている。一年生で、しかも入ったばかりなのに、そんなに早くうまくなるわけがないだろうと詰問したい気持ちが言外にあるようである。しかし幸いなことに、生徒の方がしっかりしていて、M₇でそりゃあそうだけどと反発してくれたおかげで脱線だけはしないですんだ。T₇もいけない。だめだと思っている気持ちを、押しやって、また質問である。M₈は誠に手きびしい。だから言ったでしょう(ちっともわかっていないんだなあ)である。いずれにしても話は進まないでどうどうめぐりという所である。

4月24日 放課後 相談室にて C子, M子と 第3回目

T₁ さてと、この前のことだけど、今はどうですか?

M₁ あのね……。やっぱりやめたいって気持ちなんだけどさあ。Cちゃん、あんた言いなさいよ。

C₁ あの一。やめさせてください、やっぱり。

それから、上級生に先生から言ってください。

M₂ そうそう。(語気を強めて言う)

T₂ 上級生に?

M₃ そうなんだよー。あのね、やめると言うとな、ものすごく怒るんだよー。

T₃ ははあ、上級生がこわいのね。

- M₄ そうそう。（ふーん）
 C₂ それもあるし………それから、せっかく今まで教えてもらったのに、やめるんじゃあ悪いから。
 T₄ 上級生に申し訳けないってわけね？
 C, M はい
 T₅ そんなにこわいかなあ。
 M₅ そんなになってことでないけどさあ………
 T₆ ふーん。でも何かまだすっきりしない……
 C₃ あの一。放課後になるとね、部活動している人は遅くまで練習してるけど、たとえば

△子さんみたいにさっさと家に帰る人もいるしね。私も早く帰って勉強しないと遅れちゃうし。

T₇ ははあ、時間のこととか、勉強のことが気になるわけね？（二人そろってこっくりうなづく）それが問題なわけね。………でも部に入っていると勉強できないかなあ。そんなに気になるかい。

C, M （沈黙が続く。なおもだまっていると二人は盛んに首をひねり出す。）

以下略

その後話しは進展せず、もう少し考えてみるように話し、部をやめるかやめないかは自分達で判断して決めるようにしむけ、その結果を知らせてくれるように頼んで別れる。一週間後の朝、M子一人で教務室にやってきて、C子はやめることになり、私は部を続けますと明確に伝えてくれた。C子さんがやめるのは残念だがやむを得ない。残った君はがんばりなさいと言って帰す。

前回に比べてややうまくいっていると思うが、T₅ですっかり狂わせてしまったようである。T₆では、そんな雰囲気もあるにはあったが、何かもっと言い方がないのだろうか。C子にとってはC₃の発言が一番気にかかっていることであり、M子の場合はM₅の発言が一番気になっているらしい。一応受けとめたつもりではいるが、T₅ではぐらかし、T₇の後半でまたはぐらかしてしまったようだ。ただこの回では前回よりも気楽に話しをしているようで、言葉使いも微妙に変化してきている。

その後C子は勉学に励み、M子はめきめき上達して、新入部員の中では優秀なメンバーの一人となっている。たまたま学級担任でもあり、部の顧問でもあったが、部の顧問として動くことは極力さけ、また判断を下すようなこともせず、生徒の判断にまかせたが、本当は二人とも入部してもらいたかったのである。同じ小学校の仲良しが、一人は部に入り、他方は入らないことから二人の友情にきずが入るのをおそれている気配も感じられたが、二人仲良く登校するのを見れば、そんなこともないらしい。またやめるに際しては、上級生との間にトラブルが生じやすいが、上級生にもその辺の事情を話しておいたのもよかったのかもしれない。

事例その3

(1) 主訴 部をやめたいが上級生に言えない。

(2) 対象 A男（成績中下 知能偏差値44 根気なく落ち着かず、授業中席をたったり、いたずらをしたりで絶えず注意される）

(3) 逐語と考察 4月22日 昼休み 非常階段で A男と 第1回目

休憩時に戸を閉めようとして女生徒の指に軽いけがをさせる。昼食時には、部屋の戸を締めカギをかけ男生徒を一人とじこめ、それが原因で二人で大げんかを始める。A男にしてみれば二回とも戸締まりという良い事をしたつもりが裏目に出てしまい心外でならない。被害に会った生徒は、わあわあ泣くがあやまる気はない。何とかその場を繕うつもりで二回ともA男をあやまらせることになってしまった。

T₁ どうだ、さっきのこと。気がすんだかい。

A₁ ……………

T₂ それとも、残念だとか。

A₂ ……………（しばらくしてかすかにこっくり）

T₃ そう。無理もないね。せっかくいいことしようと思ったのになあ。

A₃ すいませんでした。

T₄ いや、そんなに気にしないでいいんだよ。

だけど今日は色々ある日だね。何か原因があるのかな。こまっているとか、おもしろくないとか、何でもいいからよかったら話

してみないか。(沈黙) 何かこまったことでもあるの。(かすかにうなずく) あゝそう。何だろうなあ。話したくないとかい。(大粒の涙をボロボロこぼす) やっぱり話したくないんだね。

重苦しい沈黙。身動き一つしない。五限の授業もさぼって話しかけるが、反応なし。

ここは、A男の良い事をしたつもりの気持ちを充分聞いてやれなかった教師が、後悔のあまりにとり乱している所である。案の定A男は心を開かない。

4月23日 昼休み 相談室にて A男と 第2回目

T₁ やあ、どう今日の気分は。

A₁ いいです。

T₂ あゝそう。それはよかった。実はだいふ心配してたんだ、昨日のことで。

A₂ 昨日はどうもすいませんでした。これから気をつけます。

こんなやりとりがあって、昨日より表情は明るいが何も得るものがなく終る。

T₃ ふーん、そうねえ。人間だから、カーッとなることもあるだろうけど、すぐむきになったりしない方がいいってとこかな。

A₃ はい。

T₄ こまったことがあったら、いつでも聞かせてくれよ。

T₅では少し説教がかったいるが、それ程強い意味ではないつもりである。だが、この回では教師の思いと裏腹に、A男は「この先生はちっとも怒ってはいない」という感じを持ったようである。

4月26日 放課後 相談室にて 第3回目

部活動をやめられるかどうかと問いかけてくる。事例2と同じ理由でやめられると知ったときのうれしそうな顔。実の所はA男は柔道部の練習がいやになっていたのであり、上級生がこわくて口に出せなかったのである。A男はその日のうちに担当の先生と話し、柔道部をやめている。

いささかまわり道をしたが、結局はけがをさせたり、けんかをしたりは、部をやめたいが、やめられない、いらだたしさの伏線であったといえよう。また、けんかなどの場面にであうと教師までが、うろたえてしまうようでは困ったものである。その後のA男はすっかり落ち着きを取り戻し、熱心に学習している。

Ⅱ おわりに

ごくありふれた事例を取り上げてみたが、必ずしも良い結果が得られたとは思っていない。また、個々の場面では失敗としか言いようのない教師の発言もあって、今後の戒めとしなければならない。ここでは個人的な問題を取り上げたが、これらの問題を解消することにより、学級全体が高まることになれば、あながち無駄ともいえまい。事例中の生徒は現在も他の生徒と何ら変ることなく学習しており、またその後のアンケートでも、学習や部活動にうまく適応しているようすがうかがえる。ただM子のみが「部活動もいいが、休み時間が少なく、せめて部活動のときくらいのんびりしたいが、先生がそうはさせてくれない。」とアンケートの中で言っている。問題が残りそうである。

まず、何でも気軽に話し合える学級をと願った初期のねらいは、ひとまず達成できたかに見えるが、もっと生徒の心の奥深く入り込んで行く必要を今感じている。幸い、どこまでも気の良い生徒達は、今でもよく話してくれる。これを足がかりに一層研修を深めたいと思っている。その意味では前途は明るい。なぜなら、教育相談の道を今スタートしたばかりなのであるから。